

本の万華鏡

『食道楽上・下』

村井弦齋著 — 岩波文庫 二〇〇五年

推薦者
黒岩 比佐子
(くろいわ・ひさこ)

ノンフィクションライター。一九五八年東京生まれ。八一年慶応義塾大学文学部卒業後、PR会社勤務を経てフリーランスのライター・編集者となり、企業広報や社史制作に携わった後、ノンフィクションライターとなる。二〇〇四年に明治期のベストセラー『食道楽』の著者である村井弦齋の本格的な評価『食道楽』の人物村井弦齋(岩波書店)でサントリ学芸賞を受賞。その他、音のない記憶 るつあの天才写真家井上孝治の生涯(文芸春秋)、伝書鳩 もつとつとつ(エト)『食育のススメ』(以上、文春新書)、編集者 国木田独歩の時代(角川選書)など。



村井弦齋という名前を聞いて、すぐに思い当たる人は、かなりの近代文学通でしょう。村井弦齋は明治中期から大正期に活躍した作家で、晩年は食物の研究に没頭し、多くの著作があります。特に、一九〇三(明治三十六)年に新聞連載された『食道楽』は、単行本も飛ぶように売れて、明治を代表するベストセラーの一つになりました。

なぜ『食道楽』という小説は、それほど人気を博したのでしょうか。それは、小説のなかに和洋中にもわたる料理が六百種以上も登場し、その一部は作り方まで説明されるというユニークな趣向が読者に歓迎されたからでした。当時の庶民にとって西洋料理は、まだ高級なものだったので、文中に登場する料理の名称は憧れをかきたてたことでしょう。ステーキ、シチュー、スープ、サラダ、デザートの数々。世界三大珍味のキヤビア・トリュフ・フォアグラまで出てくるには驚かされます。さらに『食道楽』では、ナイフとフォークの使い方やスープは音をたてずに飲むことなど、テーブルマナーまで紹介されています。

『食道楽』の主人公の大原満は名前が示すとおり、腹が突き出た、いわば元祖「メタボ男」です。その大原の食生活を改善する役割を果たすのが、美人で料理が得意なお登利。『食道楽』は、この二人の結婚話をめぐって展開していきます。

百年以上前に書かれた小説ですが、『食道楽』に盛り込まれた食に関する情報は、いま読んでも古さを感じさせません。それどころが、現在の日本のことが書かれているのではないかと、錯覚しそうな話も出てきます。たとえば、悪徳業者が舶来の高級品のビンに国産品を詰め替えて売るとか、純粋バターと称して植物油や豚の脂を混ぜて売るとかは、まさに「百年前の食品偽装」です。また、日本酒には防腐剤としてサリチル酸やホルマリンが入っていることが多いので、毎日飲むと命にかかわる、という怖い話もあります。儲かるなら何をしてもいい、という商人の態度には唖然としますが、昨年起こった一連の食品偽装事件を思えば、『食道楽』に出てくる商人を笑つことはできません。しかも、当時は公的機関による食品の検査や規格の設定などが、ほとんど整備されていない状態でした。そういう時代に村井弦齋は、食品偽装や不正を告発し、身体の内側に入る食物だからこそ自分で安全を見極め、危険な食品にだまされてはいけない、と警鐘を鳴らしたのでした。

さらに弦齋は、この小説で、すでに「食育論」を説いています。「食育基本法」が制定されたのは二〇〇五年ですが、その百年以上前に「体格を向上させるには筋骨を養つ食物が必要で、脳を発達させるにも脳の栄養となる食物を食べなければならぬ。体育よりも知育よりも食育のほうが大切である」と指摘したのです。料理を楽しむながら実用知識や教訓も得られるこの小説は、まさに「食育小説」と呼ぶにふさわしいといえるでしょう。

from editor's room

- 『地域の力 食・農・まちづくり』大江正章 岩波新書(2008年)
- 『服部幸應の食育の本 Vol.2』服部幸應監修(株)グリーンハンド「笑う食卓」編集室(2008年)
- 『キッコーマンのグローバル経営 日本の食文化を世界に』茂木友三郎 社会経済生産性出版(2007年)
- 『日本料理の歴史』熊倉功夫 吉川弘文館(2007年)
- 『食育のススメ』黒岩比佐子 文春新書(2007年)
- 『フード・マイルージ あなたの食が地球を変える』中田哲也 日本評論社(2007年)
- 『それでも「好きなものだけ」食べさせますか?』田中葉子、鈴木正成、村田光範、福岡秀興、室田洋子他 日本放送出版協会(2007年)
- 『食の力 豊かな心を育てるための食育論』下村尚子 どりむ社(2007年)
- 『「義務教育の構造改革」と学校の課題 伝統文化・食・情報の教育』北俊夫 文芸堂(2007年)
- 『食の未来の先駆者たち 食文化再生、食育、そしてスローフード』金丸弘美 コープ出版(2007年)

- 『フードファディズム メディアに惑わされない食生活』高橋久仁子 中央法規出版株式会社(2007年)
- 『平成19年版 食育白書』内閣府(2007年)
- 『食と農のつながりに学ぶ 子どもの瞳が輝く授業』興平大和 ルック(2006年)
- 『いま「食べること」を問う 本能と文化の視点から』サントリー次世代研究所 企画・編集 伏木亨・山極寿一編著 農山漁村文化協会(2006年)
- 『日本人の正しい食事 現代に生きる石塚左玄の食養・食育論』沼田勇 農山漁村文化協会(2005年)
- 『感じる食育 楽しい食育』サカイ優佳子、田平恵美 コモンズ(2004年)
- 『人は食によりて人となる “食育”の最新線を巡る旅』歌代幸子 エイチアンドアイ(2003年)
- 『食の世界にいま何が起きているか』中村靖彦 岩波新書(2002年)
- 『人間形成と食育・食教育 食のいとなみがからだをつくる・心を育てる』新村洋史、猪瀬里美 芽ばえ社(2002年)
- 『遺伝子組み換え食品を検証する ジャーナリストの取材ノート』中村靖彦 日本放送出版協会(1999年)